

幕末期における宇和島藩の動向(2)

——伊達宗城を中心に——

三 好 昌 文

前稿 (第10巻 第6号)

はじめに

- 1 弘化元年宗城の襲封～嘉永6年6月ペリール航
- ア) 宇和島藩の概略
- イ) 伊達宗城と徳川斉昭等雄藩大名との関係
- ウ) 宇和島藩の軍事改革(A)
- エ) 徳川斉昭と宗城(A)
- オ) 宇和島藩の軍事改革(B)

承前 カ) 徳川斉昭と宗城(B)

伊達宗城は、嘉永元年(1848)3月3日、参勤交代のため宇和島を出発し、4月7日に江戸に到着した。宗城は義父宗紀とともに多くの書翰を斉昭に送り、内外情勢、とくに松前口・琉球問題、海防策について意見を交換している。

嘉永元年正月5日付の宗城書翰では¹⁾ 斉昭の7男昭致(七郎麿、慶喜。弘化4年9月11日一橋家を嗣ぐ)等の養子を慶賀し、藩士戸田銀次郎忠敞(蓬軒)・藤田虎之助彪(東湖)の役儀召放蟄居の解除(隠居)と斉昭の反対派結城朝道の禄半減・慎隠居に触れている。しかし、幕府の浦賀防衛策は進展せず、領内矢野・保内両組の巡視を知らせている。正月14日付の宗紀書翰によると²⁾ 両藩の領内図は交換して閲覧され、鹿児島藩の琉球対策について不安を表明している。そこには同藩の内訌と斉彬の継嗣問題が存在した。

帰府後の5月3日付宗城書翰では³⁾ 斉昭に『三兵活法』(鈴木春山訳、弘化3

年刊) および「二兵総説」(攻守術書か)を貸与すること、『阿芙蓉彙聞』(塩谷宕隠著, 弘化4年自序。アヘン戦争の記録・論考)の借覧を願っている。嘉永元年に入り, 外国船が陸奥・対馬・壱岐にしきりに接近し, 「近海崎陽(○長崎)にも不遠参可申」と憂慮し, 幕府の無策と帰国中の「一年之間に世上弥増浮弄之悪俗に服し候様奉存候」と歎息している。「ウラルシキート製法書」(火薬製造書か)の所持を伝え, 同書は「新発明の由にて, (○火薬は)猛烈之薬力, 合薬にも可勝と奉存候」と述べていて, 製造法は未知だが, 従来之火薬に勝る「奇薬」だと考えている。

同3日付の宗城書翰では,⁴⁾「極密風説書抜」によって, 香港から英蒸気船フルチュレ号が舟山列島から清国北方の港に来て, 日本をめざして試航していると情報を伝えている。また, 米船モリソン号事件後, 長崎奉行久世広正は日本人漂流民の送還は紅毛(オランダ)船か唐船かによるよう, オランダ商館長ニーマンに提案していた。また, イギリス人, フランス人の日本渡来もしないようオランダ人を通じて申し入れようとしたが, それぞれの国の外交方針により拒否されたという。

同5日付宗紀書翰では,⁵⁾「迭魯乙多兒船軍図」(不明)の抄訳を借用して筆写中とのこと, とくに外国船が朝鮮・秋田・松前に来航し, 秋田に関する情報の入手を求めている。琉球における密貿易の実行を推察する。

同年4月, 幕府は西丸留守居筒井政憲に異国船打払令を諮問するなど, 対外強硬路線の復活も考慮していた。この段階では, 斉昭・宗城らの攘夷論は, 幕府老中首座阿部正弘への工作において有効であった。

6月2日付宗城書翰では,⁶⁾米捕鯨船が西蝦夷に漂着, 幕府は松前藩主松前昌広に命じ, その乗員15人を長崎に護送させたことを「甚可疑挙動」と批判している。高島流砲術家下曾根金三郎信敦(筒井政憲次男, 西丸小姓組)の娘が斉昭の館に勤めていることを, 斉昭の幕閣工作上の手段と考えている。この書翰で, 宗城の側近松根内蔵(のち図書)が斉昭等との間の周旋を務めていたことが分かる。松根は宗城とは水魚の交わりをしていた。この2人にとって, 斉昭

は「天朝公辺之御為、神州之御柱石」の存在であった⁷⁾

7月22日付宗城書翰では⁸⁾宗紀同様に松前藩の処置について進言している。両者はおそらく江戸に亡命していた松前藩元用人山田三郎から松前藩と蝦夷地に関する情報を入手していたと考えられる。藩主松前志摩守昌広は病身で、祖父章広の弟広当(広純)が国家老として実権を掌握し、昌広は天保13年、17歳で罷免され、藩の内訌は絶えなかった。この実情を踏まえ、松前藩の転封と蝦夷地防禦の強化を説く。7月初旬、宗城はその旨建言していた(阿閣へ遣候舌代覚)。

こうして、嘉永元年7月以降、斉昭と宗紀・宗城の関心は北方蝦夷地防衛問題に発する松前家転封問題となり、寛政期以後の幕政、とくに弘化・嘉永期の阿部正弘の海防策への批判となって展開する。当時、水戸藩内事情としては、新藩主慶篤への高松・守山・常陸府中三連枝の後見体制が、阿部正弘の公認のもとに崩れ、隠居斉昭の藩政指導が回復していく時期であった⁹⁾

嘉永元年7月頃の宗紀宛の斉昭書付によると¹⁰⁾松前藩主松前章広が文化4年7月21日、「西蝦夷の儀は非常之備等其方手限難行届段申立、外国之境不容易事ニ被 思召候間、此度松前・西蝦夷地一円被 召上候」として、幕府から奥州伊達郡梁川9,000石に転封された件を取り上げている。(享和2年7月24日、幕府は東蝦夷地を、文化4年3月21日、さらに西蝦夷地を返上させ、文政4年12月7日に章広に旧領蝦夷地を領有させていた。天保2年(1831)1万石に復した)。斉昭等はロシア人のラッコ島(ウルップ島)・エトロフ島占拠、ラッコ皮の交易などを「幕府の御不為、且徳川家の恥辱」と考え、蝦夷地を「此上ニも奪れ候ハ目前」として、侵略の危機感を募らせている。宗紀らは蝦夷・琉球問題について、幕府の強硬策をさらに求めている。

8月8日付宗城書翰では¹¹⁾激化する斉昭雪冤運動がさらに新しい水戸藩内の対立・動揺をもたらし、老中阿部正弘は斉昭の主張を理解するようになったが、いまだ不安の存在することを指摘している。幕閣内における筒井政憲・下曾根金三郎父子に対する疑惑に触れ、松前氏の再度の転封を幕閣に働きかけて

いる。さらに国学についての教示を願い、吉田令世（活堂）著「声文私言」を借覧し、会沢正志斎著「廻彝篇」、藤田東湖著「常陸帯」も借りている。宗城は佐藤一斎とも強いつながりを持っていることは「藍山公記」に明らかであり、強力な実践性を持つ学問を求めている。松前家転封は幕府の取り上げるところとはならなかった。下曾根からも幕府内部の「有志」の存在は、この時期にはまだ確信されていない。

9月11日付宗城書翰では¹²⁾「蘭人別段極密風説書」により「遠西騒乱、仏王も英夷へ落行、其他各国一揆起候趣云々相見申候、可喜儀奉存候」と、1848年フランス2月革命の情報を伝え、最近は兵学・字典の蘭書も多く渡来するようになったという。宗城らは極東における外圧の情勢だけでなく、欧米の政情・経済情報の入手まで心懸けるようになっている。

11月5日付宗城書翰では¹³⁾幕府内部の情報及び来藩中の高野長英（後述）翻訳の「タクチーキ」（「三兵答古知幾」）の進行、蘭書「練兵訓語」の貸与を知らせている。琉球滞留のフランス人の退去、英人医師ベッテルハイムの在留を知らせている。

嘉永2年（1849）正月26日付宗城書翰では¹⁴⁾佐賀藩製造の綿火薬が水戸・宇和島両藩にも届いている。「既ニ先日肥（○肥前）手製ハ些少計到来仕、試候処、随分猛烈ニ出来候様ニ存候間」、製法を問い合わせているという。対幕閣工作は、下曾根金三郎から有志の獲得を拡大している。宗城は水戸藩の付家老のみならず、紀州藩・尾張藩の付家老らの動向にも通じ、同志と反対派の識別にも努めている。御三家・御三卿は幕府の制約も受けるが、幕閣工作には重要な存在であった。

正月27日付宗紀書翰では¹⁵⁾老中松平乗全（三河西尾藩主）が松前家の近親のため、転封問題は難航し、山田三郎とも疎遠になり、蝦夷地防衛策は進行していない。また、琉球でも依然英人が在留し、鹿児島藩家老調所笑左衛門広郷は、前年12月18日、密貿易の責任を負うて江戸邸で自殺している。下曾根は老中阿部正弘・松平忠優の家臣の砲術指南の工作をしている。

2月22日付宗城書翰では、¹⁶⁾「三兵活法」「鈴木必携」(上田亮章著・下曾根金三郎関、砲術書・2冊)、「兵学小識」「西軍二兵総説」の所蔵を告げ、「近来ハ猥に西洋軍書和解出来、其内にハ偽物多く」と、注意を喚起している。なお、斉昭から「洋海戦争之珍奇図」を借用している。同月の斉昭書翰では、¹⁷⁾幕閣内における老中阿部と両松平(松平乗全・同忠優)の対立について触れ、水戸の「奸臣」も反阿部の立場を告げる。幕府が松前崇広と肥前福江藩主五島盛成に築城、沿海防備を命じたことを知らせている。また、従来存在した斉昭と大奥の対立緩和のため、姉(大奥老女筆頭姉小路・橋本いよ、親阿部派)に働きかけている。この段階で、斉昭の工作と宗城らの働きかけはよくかみあっているといえよう。幕府は水戸藩内の派閥対立から斉昭を牽制している。¹⁸⁾

3月18日付宗城書翰では、¹⁹⁾「銃書」(書目未詳)、「ゼーアルチルレイ之訳書」(Zee-Artillerie, 海上砲術書)の借用を願っている。また、「大銃早打ニ相用候シュンドルス並ニペーピーイ杯」に水戸製の本書紙が適するとして、惠与を願っている。シュンドルス=スナイドル銃は、フランスのミニエー銃の改良された英国銃、ペーピー=ペッパー・ボックス(胡椒入れ)型英国製の6連発銃である。すでに宗城には進歩した洋式銃に関する知識があったことを示している。

キ) 高野長英の来藩

宗城は、嘉永2年4月27日江戸を出発し、閏4月25日宇和島に帰国した。江戸での後事は養父宗紀(春山)に託されている。これに先立ち、弘化3年10月19日に伊東玄朴の象先堂に入門して蘭法医学を修行していた富澤礼中は、嘉永元年2月30日、足軽2人を供にし、出羽国の浪士伊東瑞溪を「道連れの体」にして宇和島への帰国の途についた。礼中は19日に帰国を命ぜられ、29日に金2,000疋を下賜されていた。一方、宗城は参勤のため上府の途にあり、両者は3月21日に宇和島藩大坂藩邸で会い、長英訳と考えられる蘭書を与えられ、翌日礼中は羽織を賜っている。²⁰⁾

伊東瑞溪は高野長英の変名である。周知のように、長英は脱獄後江戸へ再潜入した頃、幕臣の著名な数学者・内田弥太郎（明屋教番伊賀者、嘉永2年8月には浦賀奉行手附、麻布六本木住）らの保護を受けていた²¹⁾この内田の門人に宇和島藩士の数学者徳久忠介がいるが、忠介の入門は長英没後であろう。「三楽松根図書事績考」には、長英を来藩させたのは宇和島藩家老松根図書（紀茂）だとしている²²⁾宗城は『夢物語』や『慎機論』を読んでいるが、図書は内田を介して長英を知り、長英の宇和島来藩を計画したのでであろう。先述の長英訳の蘭書とは、『訳業必要之書類目録』『知彼一助』であろう。後者は弘化4年4月下旬、長英が参勤交代のため帰国の途に着く宗城のために献上したもので²³⁾その内容は『兵制全書』の抄録である。したがって、弘化3、4年頃には長英は宗城の知遇を得、極秘裡に内田・松根を経て交渉していたと考えてよい。前者は長英が宇和島で兵書の翻訳に必要と考えられた書物で、辞書・陸軍兵書・水戦兵書の四種を含んでいる²⁴⁾その中で、「タクチイキ。デル、デリイワアペン」（Taktik der drie wapens, Brandt 著の三兵戦術書の蘭訳本）には、長英が「右ハ三兵配合活用ノ術にて、戦闘中の軍中指揮使ニ属スル要務ヲ記載仕候、^{プロイセン}李漏生国の総兵大隊中のマヨール官ヘインリフ。ホン。ブランド、人名（○Heinrich von Brandt）著述仕候、水越侯（○水野越前守忠邦）其他ニも蔵書之由、近頃写本も諸処ニ有之候得共、壱部原本御詔奉願候」と記している。宇和島へ来る以前より同書の翻訳を開始し、滞在中に訳了したと考えられる（安政3年『三兵答古知幾』として暁夢楼主人の名で刊行）。なお、前述のように、宇和島藩には下曾根金三郎から「兵学小識・海防新編・兵制全書・火具編・三兵多苦知幾・ミリタイレハンヘレトンスコール訳」が所蔵されており、「三兵答古知幾」の完訳が必要視されていたのでであろう。

さらに、高島秋帆所蔵の蘭書、宗城が鍋島齊正から借りて筆写済みの蘭書6部もあり、これらは伊東玄朴に蘭学を学んだ富沢礼中、嘉永元年に象先堂に入門した砂沢杏雲らも医学に止まらず、兵書の翻訳に当たらせる宗城の意企があったと考えられる（二宮敬作は兵書翻訳に関係なし）。

松根函書(当時内蔵)は維新後、「高野長英事(○中略)当時海防専務ノ節、外国事情ニ委敷人、長英ニ次者無之、世之ヲ惜ム。其頃内田弥太郎ニ談、長英ノ事ニ及ヒシニ、弥太郎曰、極密ナレトモ当時存命ナリト。一面会ノ事迄、麻生藪下ノ裡屋ニ潜居スル趣故、密ニ同所ヲ尋レ共、処在更に知レス。無拠時日ヲ過ス内、一日弥太郎方ニ閑酌中、大坊主アリ。音声奥州ノ言葉、必定是長英ナラント快談鯨飲ス。此時君上(○宗城)ニ極密言上ス。宇和島潜行ノ内命アリ」と述べている²⁵⁾

長英の来藩は宗城の大英断であったが、斉昭から托された菊池為三郎の先例に習ったものであり、宗紀・斉昭・斉正には知らされていた可能性がある。同時に、長英は蘭語の兵書は英仏独三国の翻訳本であるため、この三国語と蘭語との対訳辞典・文法書を求め、正確な翻訳作業を考えていた²⁶⁾

長英の宇和島到着は4月2日の深更、一時町会所を宿舎とした後、横新町の桜田佐渡の別荘に移った²⁷⁾ 6日、吉見左膳に「一、今度蘭書翻訳御用ニ付、富澤礼中同道ニ蘭学者伊東瑞溪御呼下ニ相成、右御用相済候迄逗留被仰付、桜田佐渡別荘ニ被差置、御扶持方四人分被下、翻譯料ハ時々申出候節可被相渡候間(○下略)」として、吉見左膳・富澤礼中の世話のもと、長期にわたる蘭書の翻訳に携わる御雇い蘭学者の身分になった²⁸⁾ 8月2日の礼中の「演舌控」によると、「御仕成金御翻譯料」のうちから、江戸の家族の生計のための仕送り金として金10両の前借を願い出ている。4月23日、谷依中・土居直三郎・大野昌三郎の藩士3人が長英に従学を命ぜられた²⁹⁾ シーボルトの門人・卯之町の在医二宮敬作の子の逸二も学僕として従学し、11月6日には、昌三郎の実兄・斎藤丈蔵にも修行が命ぜられている。

5月8日、内田弥太郎が近日浦賀に出張するので、27日、藩士宇都宮九太夫・田中安兵衛に随行して砲台等の調査が命ぜられた(田中は6月7日中止)。6月15日に宇都宮・豊田丈左衛門が浦賀に行き、25日江戸に帰っている³⁰⁾ 在府中の宗城は、沿岸砲台の建造を考慮している。5月25日、田中は蘭学修行のため玄朴に入門、同じく松澤玄折も医学修行のため入門している。宗城は軍事と医学

の両面から玄朴の象先堂に依存している。6月27日、宇都宮・田中・大森縫殿は、火術修行のため佃島沖へ出張している³¹⁾ 7月23日、25日に徳丸原で、中島流火矢の演習を下曾根金三郎が実施するため、打前伝授のため宇都宮・豊田・田中・大森・堀江南平の5人が派遣された³²⁾ 嘉永元年当時、宗城は丹波綾部藩主九鬼式部少輔隆都^{たかひろ}・同福知山藩主朽木近江守綱張^{つなはる}、幕臣竹越兵部少輔・実兄山口丹波守直信・佐藤一斎とはとくに親密で盛んな交流があった。11月5日、浦賀における大砲試射に宇都宮・堀江・豊田が派遣された³³⁾

さて、宇和島における高野長英に帰ろう。長英はデッケルの「三兵タクチーキ」をテキストとして、土居ら門人に蘭語教育と翻訳を並行させ、「埴氏三兵答古知幾」9冊を訳出した(ただし、長英は巻数未定とする)。第二に「礮家必読」全備11冊、長英は「此ハ諸台場の造法ヲ詳ニスル書にて、砲術家一日モ欠ク可カラサルノ書物ナリ、右台場雛形数通添」と記す。この書は、宗城が齊昭に伝えた「砲台製造之訳書」で、1832年刊行のオランダ砲兵大尉スチールチイス著『砲台学入門』(Stieltjes, G. J. : Handleiding tot de kennis der verschillende soorten, Berda)の翻訳である。第三に「鉄砲鑄造之訳書」は「新制鉄礮鑄法」(巻数未定、二冊出来)で、ヒュヘーニン著『国立レイク鉄砲鑄造所における鑄造法』の訳で、以上3冊は長英の訳出書である。齊昭に言う「練卒訓練」は、宗城は8冊訳出と言うが、「訳著書解題」には「右巻数未定 初編、二編 十冊出来」としているが、佐藤氏はこの訳出は別人と考えている。現在、所在が判明する唯一の完訳書は「礮家必読」全11巻11冊とされている³⁴⁾ 御雇い蘭学者長英は藩の処遇に不満を抱きながらも、学術的に正確な翻訳に努めた。なお、兵書の翻訳には、象先堂に学んだ蘭医がさらに関係している可能性もある。

11月22日、板倉志摩之助・松田源五左衛門は長英を随行して御庄に行き、12月朔日に帰っている³⁵⁾ これは、宗城が初入国当初から計画していた沿岸砲台建設の一環のためである。御庄組外海浦の本浦は深浦で、久良浦はその枝浦である。深浦港防禦のための高台地を有して台場(砲台)建設の適地と選定されていた。長英自筆の「砲台土図」(三十三分一之割合)によると³⁶⁾ 久良砲台設計図

は攻城超シャクリウチ砲台とされ、胸墻・砲眼（内口の深さ6分、外口3、4寸、下の処は3寸、上の処は3寸5分に開き、「斜発ノ為に便利に致候」とある。胸墻内に疊道あり、その所の深さは1尺で、砲手・砲車等がある。内坂の傾度7分、砲車の輪と砲口の突出が砲眼に合致する。外坂は敵兵の登坂を防ぐ。隔墻はその上に廡木を設け屋根を作り、上に土1寸を置いて、平日や雨日は砲・砲車を待避させる。薬丸倉は砲2門に1座の割で、防水して火薬を備蓄する。備砲3門であったとされるが、長英は「ホウウ井ツ、ルとモルチイルハ、別に又此倉を作り候事ニ候、此ハ「ボンベン・ガラナード」の如き弾丸ヲ貯候ゆへニ御坐候」と記していて、さらに備砲を加える用意がなされていたかに考えられる。

久良砲台の完成は、嘉永3年3月～5月とされ³⁷⁾ 威遠流砲術家の実務と長英の兵書に基く設計図の作成により建設された。もとより、外海浦庄屋二宮市右衛門らの土木工事への協力が必要であった。同3年5月2日、藩は宇都宮九太夫・板倉志摩之助・徳久忠介にそれぞれ菱木綿2反を賞与、二宮市右衛門に「此度御台場築立ニ付、右之者御用向申付候処、日々早朝依致出張、格別骨折出精相勤候趣ニ付」として、木綿2反が賞与されている。なお、久良砲台の砲の名称はカルロンナーデとされ、元治元年(1864)5月17日、シャクリウチから「鷲管打」という雷管使用に改良されている。

嘉永2年春（1月下旬か2月初め）、長英は宇和島を去り、琴平・広島・鹿児島へ行き、5月下旬に帰って、卯之町の在医二宮敬作方に寄遇した。この時、斎藤丈蔵は代官、菊池為三郎も卯之町で保養し、大野昌三郎もたびたび長英を訪問している。とくに、大野は長英門下の逸材で、あくまでも長英への従学を希望し、長英が大坂・名古屋を経て江戸に帰っても交信があり、長英が在宇中に「西船雛形」の研究をしていたこと、「此節天下の一大用は洋学に候」と蘭学からの脱皮を大野に伝え、江戸に来るよう言っている³⁸⁾ 嘉永3年2月25日付齊昭宛宗城書翰によると³⁹⁾ 「長英此節江戸ニ参候由之処、又立去、当時ハ居不申由に御座候」と伝えている。これによると、宇和島退去後も長英の動向は齊昭に知らされている。前年8月、長英は江戸に帰り翻訳に努めていたが、同3

年正月、下総国香取郡に一時潜伏、3月に江戸に帰って、青山百人町で医業を営んでいた。その死は10月朔日である。

ク) 宇和島藩の軍事改革(C)

宇和島藩領内で久良砲台の建設が開始される一方、江戸では威遠流砲術の研究がさらに進んでいた。嘉永元年11月26日、宇都宮九太夫・堀江南平、27日に豊田丈左衛門が下曾根方での砲術寒稽古を行っている⁴⁰⁾ 藩の威遠流指導者は、国許と江戸の両方でその完成をめざしている。

嘉永2年正月3日、長崎港伊王島・神ノ島砲台増築について、佐賀藩と福岡藩の間に確執があり、宗城は阿部正弘にその和解について尽力している。この事件は複雑な様相を呈するが、宗城の関心の程をよく示している⁴¹⁾

2月22日宇和島では、桜田佐渡の検閲下で、千葉ヶ瀧上から和泉ヶ森へ威遠流試射が行われている。3月15日、宇和島で伊東瑞溪の門人・浚治なる者が宇和島に来る途中災難に逢い、罹病したが、瑞溪の大切な書物を持参したので、是非面会したいと申し出たが、瑞溪は直ちに今朝発足したと富澤礼中が届け出たという記事がある⁴²⁾ 以上は何を意味するのか不明瞭であるが、長英はすでに広島に行っている時期であり、斎藤丈蔵・大野昌三郎兄弟らに、下女兼妾のトヨや荷物の処理を依頼した時である。おそらく書翰や翻訳書を持参したのであろう。

4月1日、宗城は徳久忠助に扇子を与え、その自書の中で、「右、先頃直ニ九太夫江令沙汰、鈴林必携算当書入之儀申付候処、役方繁多中致出精、細密ニ出来、大ニ有益ニ相成、一段之義(○下略)」と述べている⁴³⁾ 忠介は天保4年5月「業方拔群」とされ勘定列に抜擢された徳久忠介の子で、幼名定之助、天保14年7月7日、江戸で父の跡目を相続し、弘化3年正月から忠介を襲名した。嘉永2年9月27日、「算術天文測量拔群、且貞実相勤ニ付」として中之間に進み、見届役を命ぜられ、三術懇望の者に教授を命ぜられ、同6年12月27日、江戸詰中、威遠流御用引除(専任)を命ぜられた。久良砲台・樺崎砲台建造にも関

係し、内田弥太郎門人でもあった注目すべき人物で、万延元年5月、御舟手證人役目付兼帯となっている⁴⁴⁾「鈴林必携」は「鈴林必携^{けん}」(上田亮章著、下曾根(金三郎)桂園閣の砲術書)の誤写であろう。同書は嘉永2年2月22日付宗城書翰にその所持を斉昭に知らせている。入手後、宗城は直ちに忠介にその数理的研究と概算をさせたのである。忠介は、同2年4月25日、内田弥太郎に従学して「測量練習」を命ぜられ、年金3両を下賜されることになった⁴⁵⁾すでに、忠介は天保末年から在府しているのであるから、数学は修学を終えていたと考えられ、久良サ、レ鼻の砲台築造に伴う海岸測量が考慮されたのであろう。

同年4月27日、宗城は参勤交代の帰国の途に着き、閏4月25日に帰国した。この日、板倉志摩之助は御座敷番を命ぜられ、5月2日、桜田佐渡が依願免職されている。

5月5日、老中阿部正弘が三奉行に渡した文書が記録されている⁴⁶⁾その中で、「近来異国船致渡来候所、昨今年者西北海対州南部・津軽、都而奥州之間松前辺夥敷通船いたし」と、外患の実態を把握し、同年の長崎へのアメリカ船の渡来、浦賀へのイギリス船の来航を指摘し、「其儘差置候ハ、愈蔑視致シ驕恣傲慢之所業ニモ及可申哉、左候時ハ御国体にも抱り候義、何其儘打捨可申筋ニ無之候間」と、文政の異国船打払令の復活という強硬策まで考えている。しかし、打払令の撤回と薪水給与令の発布後、西洋諸国による格別の非法行為もないので、「俄ニ御改革有之モ却而争論(○下略)」を招くとして、諸藩に海岸防禦の強化を求め、「厚く勘弁考究之上、忌諱不敬ニ涉り候事たり共、聊無遠慮了簡之程、早々可被申聞候事」と、防禦に関する建言の提出を求めている。この事は、斉昭、宗城にとっては不徹底という反論も可能であろうが、自藩の軍事改革の根柢とはなろう。

5月12日、威遠流の上達者に免許が与えられた⁴⁷⁾秘事製薬取扱いが小関慶太郎・桧垣弥三郎・水野雅次郎、初伝が宍戸政太郎・市川殿面・今泉松之助・戸田豊之允である。同月20日、家老桜田数馬に威遠流頭取、御長柄組頭松川伴左衛門・御持筒頭助神尾帯刀(家老)・同今泉造酒左衛門に、備形調練の時持筒

頭代理を命じた。同月30日、昨年来の長英の蘭書翻訳御用に尽力したため、吉見左膳に押掛1、富澤礼中に羽織1が下賜された⁴⁸⁾

6月4日、宗城は横吹に行き、威遠流大銃試撃を検閲した。宇都宮・板倉・松田等が賞詞されている⁴⁹⁾ 7日には異国船漂流警固の時、威遠流大砲を出動させるため、大森忠左衛門・田中安兵衛に威遠流砲術家を命じている⁵⁰⁾ 22日、宗城は鈴木忠右衛門・今泉造酒左衛門に鉄砲頭を命じた⁵¹⁾

7月18日、宗城は猪越仮屋に行き、威遠流野戦、自縁流・南鵬流等の試発を検閲、とくに威遠流はボンベン11発を試射、森丈左衛門の早打が称賛されている⁵²⁾ 22日、宗城は自書をもって威遠流の免許を与えている⁵³⁾ 幕入が前記小関・桧垣・水野の3人、秘事製薬が桑折中務・神尾帯刀(以上家老)・武田蔵人・三浦静馬・野本鉄太郎・葛西一平・松末虎之助、初伝小梁川慶太郎、味木三吉ら15人に野戦銃修行の上に大小銃とも修行が命ぜられた。徳久忠介は特書して、威遠流の算術測量などの秘伝の習得・教授に加え、大小銃の修行も命ぜられた。30日、威遠流13貫目焼玉、心極流・自縁流玉火矢を須賀橋上から天満山に試射し、着弾地を見分している⁵⁴⁾

8月18日、同じく須賀橋上より威遠流・不易流大銃試発を両流で21発行っている⁵⁵⁾ 24日、硝石製造の専任者・大内源左衛門の老齢のため、子の小膳に命ぜられている⁵⁶⁾ 25日には猪越で稲富流・亀島流・心極流の試発が行われている。これらの演習は、すべて宗城の計画によって実施され、古流砲術と威遠流の対抗を緩和するようにはかられている。9月24日、宇和島藩は幕府から、領内海岸について一村毎に海岸里数・丁数、沿岸の水深、隣領との境界、沿岸警備の人員・武器を記した帳面の提出を求められている⁵⁷⁾ 10月12日、城郭内山王神社下に鉄砲蔵が増築された⁵⁸⁾ 22日、板倉志摩之助は威遠流の貫目玉およびカルロンナーテ砲台の製造を命ぜられ、その原料の下付を許可されている⁵⁹⁾

11月27日、桜田数馬が威遠流頭取を免ぜられ、頭取は専任者なく、小姓頭の取り計らいとした⁶⁰⁾ この日、板倉に命ぜられていたカルロンナーテが完成し、来春試発の予定として玉薬類の下付を申し出ている。その内容を見ると、ハン

ドモルチール玉 15, 合薬 1 貫 650 目, 焰硝 2 貫 800 目, 鷹の目硫黄 250 目, 鉄実丸 2 ツ, 諸薬味代 25 匁 5 分となっている。焰硝・硫黄等は焼玉の新規製造のためであった。12 月 22 日, 宇都宮・板倉・松田から御庄組台場蔵床地ならしについて出願した⁶¹⁾ 深浦番所詰中島壱右衛門が吟味し, 蔵床左右 3 間, 半に前後 3 間御台場前後 10 間, 右脇 15 間, 左脇 10 間の場所を地ならしすることになった。

嘉永 3 年 (1850) 正月 6 日, 御野始の儀式が三島神社・尾串の森を中心に実施され, 勝軍の相図があった⁶²⁾ 16 日, 宇都宮・板倉・松田・上月新五兵衛が砲術世話を賞され, 鴨 1 羽宛が下付された⁶³⁾ 22 日, 宇都宮・板倉・徳久に海岸砲台築造の調査が命ぜられ, 井関九郎介に皆伝, 徳久に皆伝幕入, 吉田藩士戸田豊之允に秘事製薬取扱が免許された⁶⁴⁾ 2 月 3 日, 宗城は五組練兵検閲に行き, 全軍の演習が実施された⁶⁵⁾ 13 日, 樺崎で大銃・ハウエスル・カルロンナーテ砲の試射があった⁶⁶⁾ 24 日, 千本松でドライパス試発, 五百目の試発が行われた⁶⁷⁾ 25 日, カルロンナーデ・ドライパス新砲が完成し, 発射も良好であったとして, 宇都宮・板倉・松田に菱木綿 1 反宛が賞与された。27 日, 威遠流の錬達者として水野虎之助・小関慶太郎・桧垣弥三郎・水野雅次郎に扇 7 本宛, 葛西一平・松末虎之助・野本鉄次郎に同 5 本宛, 堀池玄太郎以下 8 人に賞詞を与えた⁶⁸⁾

2 月 27 日, 宗城は自書をもって海岸防禦について旗本頭に「愚案書附」を示達し, 藩士に伝達させた⁶⁹⁾ 「近年夷賊共横行の振舞」があり, 「公辺より海防予備の儀, 細々御発令有之」, 「其内先内地ヲ充実被成置候上ニテ, 無二念打払等も可致仰出御含かと奉恐察候得共」と, 幕府の打払令の復活を期待し, 挙国体制の確立を呼びかけている。攘夷論者としての宗城の思想が集約されている。

「凡日本国中にあるところの貴賤上下となく, 万一夷賊とも御国威をも蔑にしたる不敬不法の働あらハ, 誰かハ是を憤らさらん, 然は則日本闔国の力を以, 相拒み候趣意被相弁候ハ、諸藩は藩屏の任を不忘, 御旗本の諸士御家人等ハ, 御膝元の御奉公を心掛, 百姓ハ百姓たけ, 町人ハ丁人たけ, 銘々持前当然の筋を以力を尽し, 其筋々々の奉公致し候趣に相当候ク候 (○下略)」と強調する。

この論文は、弘化3年8月、朝廷の武家伝奏から京都所司代への示達、翌4年4月25日、野々宮宰相中将定祥を勅使とする、男山八幡宮への祈願を承け、祖法としての鎖国を守ることを訴える。宗城の攘夷論は尊王翼幕論と結合する。さらに、徳川斉昭の思想に立脚して、日本国の「神武万国にすぐれて」、ポルトガルの来航、家光の鎖国令、ロシア・イギリス等の来航の実態を述べ、とくにアヘン戦争における清国の敗退と屈辱、貿易の開始、キリスト教の布教を指摘する。「五大洲中に開闢以来卓平として独立し、けからわしき夷奴の足もかけず、寸地をも取得ぬハ、難有くも唯我神州にかきり可申」と強調し、天朝・東照宮、先君・先祖に報恩することを説く。宇和島藩も義山公（伊達秀宗）以来この忠志を継承し、「日本精神」を培養してきた。实用になる武器を貯え、修行して大義を遺失するなという。この宗城の思想は開国まで持続される。前年12月、幕閣阿部正弘は海岸防禦を強調し、砲台、土壘等の守備、武士・農民の活用を訴え、宗城の論文はこの趣旨も承けている。⁷⁰⁾

ケ) 徳川斉昭と宗城(C)

嘉永3年3月3日、宗城は参勤交代のため宇和島を出発、24日に伏見に到着した。この時、初めて近衛・久世・広幡・錦織・飛鳥井・久我ら多くの公卿に書翰を送っている。⁷¹⁾これは朝廷工作の開始と考えてよいであろう。4月7日、江戸に到着している。

嘉永2年5月14日、義父宗紀書翰では、⁷²⁾松前藩の転封、異国船の頻々と発生する渡来を案ずる。同年2月～閏4月、米船・英船の南西諸島・対馬海峡、隠岐・能登等への渡来は10回を数え、閏4月10日には英軍艦マリナー号が来て浦賀に上陸、12月下田に入港し測量するという事態があった。宗紀は日本の廻船の奪取等を心配して危機感を募らせる。幕府の海岸防禦も不徹底で、西丸留守居筒井政憲が同月に上申した海防策も、特に評議されなかったという。浦賀台場、井伊家の台場も無防備状態とされている。

5月20日付宗城書翰では、⁷³⁾同月2日土佐領への異国船接近を伝えている。

蘭書の所蔵についで知らせ、島津斉彬の収集も伝える。宗城は、「ブロイン ミリ
タイトル サックブック」(A. W. de Bruijn: Militair Zakboek, 兵書), 「ニウエ
ンホイス」(辞書), コンス (コンスブルユ) 著「ゲネースキユンデ」(内科書)
の3冊である。別紙で「扱又海防之義, 未タ手も当年ハ不下候得共, 此節砲台
ハ洋製ニ擬造仕度と, 専ら雛形取建罷在申候」と、久良砲台はこの時点では模
型製造の段階であったことが分かる。長英の設計とは、具体的には西洋式船舶
と同様に雛形製造だったことになる。硝石は同年初めより製造を開始して「造
硝石ハ六間半之室にて七拾六貫日程製得申候」と述べ、「当今弾丸薬杯専一相貯
候含ニ罷在申候」と伝え、シキートウヲル (人名, 火薬製法書の著者) の製法
について質問している。弘化元年からの火薬用硝石仕込みが、嘉永2年に至っ
て漸く斉昭の試供に呈することができる。

10月1日付宗紀書翰では⁷⁴⁾別紙(1)に「下曾根金三郎報告」を同封する。下曾
根は浦賀で砲術教授・警衛御用に従事し、「乍不及 国家御為ニ相成候様, 日夜
凝心魂海防之儀相考申候処, 何分当所土地不宜, 莫大之御入費無御座候而は箇
(固カ) 相守候儀出来不申」として、具体的に地勢の悪さ、浦賀千代崎砲台は
異国船の標的となるのみと指摘している。その点を幕府に上申しても、奉行・
閣老は検討もしないと批判する。中曾根は江戸防衛のためには、浦賀より敵兵
の上陸しやすい久里浜の防備を重視する。「御警衛之大躰」として、「一、砦御
造宮 一, 軍艦大小数艘 一, 台場築立 附, 大砲鑄造, 小道具・玉薬共 一,
八王子千人同心五百人, 当所移管 久利浜住居ニ而御台場其外警衛 一, 年々
軍金壹万両ツ、御下ケ」という具体策を提案している。別紙(2)には前記の嘉永
2年5月5日付老中阿部正弘達書が付けられ、正弘が三奉行・海防掛, 長崎・
浦賀両奉行に異国船打払令復活の可否を問うた文書を資料としている。

11月2日付宗城書翰では⁷⁵⁾「此節当所(○宇和島)ニ而御新造之バツテーラ
形御舟, 於浜御庭 御内覧茂可有之哉ニ而, 江戸海廻し方之儀被 仰越候」と
ある。つまり、藩主居館の庭の池でカッター様式の船が新造され、幕府はこの
船に着目している。宇和島藩の大砲製造について、「御台場御備筒十八挺有之候

得共、玉薬ハ一挺ニ付只七放九放に限り申候、西洋ニ而ハ昼夜五十放ツ、十日之貯有之候」と、弾薬の不足を歎く。「年々三百拾両ツ、御下ケ被成候様相成申候、其外之儀は未一向御差図無之候」と、幕府の措置の不徹底を指摘し、「若万一之儀御座候ハ、当所ニ而討死ハ不仕、極不忠之両勘（○奸、牧野忠雅・松平乗全カ）之首を打取候而討死仕候心得ニ御座候」と、激論を陳述し、「神祖之御武徳」を穢さぬことを願望する。

11月23日宗城書翰では、⁷⁶⁾「此度十二封度、三十封度カルロン鑄造仕、不日力ためし仕、早春試放可仕と相楽居申候」と、威遠流砲術の進歩を伝えている。

12月23日付書翰では、⁷⁷⁾水戸藩主徳川慶篤と有栖川宮織仁親王女線姫との婚約を喜び、伊達家では世子宗徳と萩藩主毛利齋元女孝姫との結婚により、宗紀夫婦・宗城夫婦・宗徳夫婦と三夫婦（三守殿・三竈）になり、財政負担増を心配している。宗城は8代藩主として藩の全権を掌握して改革を進め、前藩主宗紀はとくに宗城の参勤帰国中は幕閣・諸大名との交渉に当たり、世子宗徳は幕府への勤仕や諸大名との交遊を担当している。この三者にはそれぞれ重役・小姓等の家臣が付けられ、三者に政治的路線の相異が生ずれば三者鼎立の様相を呈するところである。だが、宗城の巧みな内政によって三者に亀裂の生ずることはなかった。

嘉永3年正月26日付の宗城書翰では、⁷⁸⁾旧冬齊昭に借用した「海上砲術全書」(Zee-Artillerie)を返還し、「遠西」(「遠西海浜裁判考」、ヒラール著「ヘットセイリフト」1839刊)は遅延するという。別紙では、幕命により作成したと考えられる大型の宇和島領海岸図(「弊邑海岸図并浅深図」)を呈覧すると述べ、海防策についての意見を求めている。

同年6月23日付宗城書翰では、⁷⁹⁾相変わらず兵書の交換・閲覧が続き、「何分裨益之書も無御座、其内砲台製造、鉄炮鑄造杯之訳書ハ、追々出来仕、当時浄写中故、不遠呈覧可仕と奉存候」とする。これは長英の訳書の浄書が宇和島で続行されていることを意味する。また「西洋風之大小軍艦製造書、何分手に入不申、よふよふ七種軍艦製造書位之儀に付、右之類書何卒密々拝見奉希上度、

原本ニ而も宜敷御座候」と述べ、軍艦製造書の借覧を求めるとともに、宇和島での翻訳が可能であることを知らせている。これは江戸潜伏中の長英なのか、大野昌三郎または象先堂出身者なのか不明だが、宇和島藩が蘭書翻訳の能力を持っていたことを示すものである。また、「此頃於弊藩、極々三味共精製ニ仕候合薬と、硝石中製ニ而製候薬と、薬力為相為候得ハ、中製之方余程勝、丁着宜敷、鏝中よこれも少く御座候由」と、宇和島での大砲試射がその性能だけでなく、各種火薬の品質の実験でもあったことが分かる。斉昭の教示を求めている。「雷火銃」訳書の完成も報じている。

同3年7月付斉昭書翰では、⁸⁰⁾宗城の火薬製造の質問に答えて、「追々砲術指南致候程の人ニも解兼候半故、貴兄方ハ御尤の事ニ御座候、一体硝石と塩とハ縁有之者故、何程精製かよろしきととも、其度を過候てハ不宜候、且精製ニ過候へハ品も少く相成申候、乍然再煮位の処ハ至極宜しく候故、再煮位の処を精製とハ可申候、塩気多候てハ常ニしめり勝なる物ニて、船中杯ニハ尚不宜候へハ、水晶の如相成候品を上品とハ可申候」として、水戸藩の神発流における火薬の使用法を教えている。船については鮒の形から日本帆船との違いを説明する。鍋島斉正、黒田斉溥・松平慶永・島津斉彬・藤堂高猷・真田幸貫等、「其外多の有志へ御問の上、是非の義ハ御定が可然候」と、洋式軍事を研究している同志を挙げている。

7月20日付宗城書翰では、⁸¹⁾宇和島藩独自の艦船の製造は「此節柄危き事と相見合可申」とし、さらに「七種軍艦製造書」その他の洋書で研究するという。また、水戸藩の内訌を心配する宗城は、久留米藩(藩主有馬慶頼)の内紛、鳥取藩(藩主池田慶徳、斉昭第五子、前藩主慶栄が5月23日死去し、8月25日養嗣子となる)の内紛も案ずる。最近「海防彙議」(塩田順庵編、嘉永2年序)を入手し書写中で、「此頃近時海防必読書」で、近代の防禦論と外国事情を記述しているとし、呈覧に供するという。

7月26日付宗紀書翰によると、⁸²⁾幕府が松前藩主松前崇広、肥前五島福江藩主五島盛政に沿岸防備策として築城を許可したことに触れ、築城よりは「第一ニ大砲数挺用意も可仕、地利ニ応シ早々可然台場等も取建、可成武用ニ心得有

之人才推挙取用，防禦第一二叶候義専一と奉存候」と批判する。尾張藩主徳川よしつぐ慶臧（福井藩主松平慶永弟）の死去による継嗣問題における内紛に触れている（美濃高須城主松平義建の子よしくみ義恕（慶勝）が嘉永2年6月4日に襲封したが，同5年2月まで内紛は激化した）。世相を「武の方ハ日々ニ衰微ハ世の中ハ難解奉存候」と歎息している。

嘉永4年（1851）3月7日付宗城書翰では⁸³⁾前年12月の鹿児島藩主島津斉興の隠居と斉彬の襲封⁸⁴⁾と琉球問題に触れている。斉昭の台場雛形についての疑問に対し，宗城は4つの図を描いて具体的に解説している。胸櫓の階段，火薬庫と胸櫓との間の覆い，火薬庫の板である。おそらく長英製作の砲台雛形であろう。斉昭から借用した蘭書の翻訳も継続し，藤堂高猷の許での訳出とも提携している。プロインSTEIN (broeien-steen, 発火石) を「何卒一片丈御下ケハ相成間敷奉希上度」と入手を願っている。

同5年3月23日付宗城書翰では⁸⁵⁾斉昭より借用の「エルンスト」（「セスセレル火薬書」か）の返呈，松根内蔵紀茂（当時若年寄，のち図書）の代わりに目付役吉見左膳を「随分有志の者に御座候」と紹介している。外様大名は「席中にてハ日夜寝食不安，種々愚考仕，御為第一と心配仕候処，御譜代大名始，旗下の面々，高枕之様子，扱々不可解事ニ奉存候」と，譜代大名，旗本の怠惰を批判する。

コ) 宇和島藩の軍事改革(D)

嘉永3年（1850）4月朔日，御庄深浦（久良）砲台付属の土蔵が完成した⁸⁶⁾翌日，板倉・宇都宮はサレ岬砲台と深浦間の山道がなく，舟運を利用していたが不便のため道路開削の許可を得た。3日，御庄砲台試射のため，宇都宮・板倉，家老桜田佐渡・桑折左衛門，田中安兵衛等が出張した⁸⁷⁾その成果の記録はない。5月2日，鉄砲の製造について，鉄砲師仁右衛門が新しく製造する銃の弾丸と旧来の「露ノ御鉄砲」では，弾丸に大小の相異があり，統一の問題が出ている⁸⁸⁾5月17日，桜田佐渡藩物頭から問題が提起され，宍戸弥左衛門藩・桜

田数馬蟠，持筒組・新持筒組も統一して，一組の火薬一人分1匁5分発として10発分15人分，1人に木綿火縄3尺，警固は1組に3人，1人につき竹火縄3尺5寸を渡すことを決定した⁸⁹⁾ また，威遠流大砲鑄造用の鍛冶炭の購入について，奈良村産の45升入1俵銀札1匁2分を，同村浅治に200俵焼かせることを板倉が許可されている。22日，沖之島番所に鉄砲5挺を常備することにした⁹⁰⁾ 宇和島藩の鉄砲・弾薬が未熟だったことが察せられる。

8月7日，宇和島で松末虎之助が造硝石引受を命ぜられた⁹¹⁾ 同日と12日，宇和島藩領は大暴風雨に見舞われ，藩は夫食米1,172俵余を支出した⁹²⁾ 田畑の損毛は，田39,367石余，畑11,707石余に達した。9月2日，大内小膳は仏海寺前焰硝工場を増築した⁹³⁾ 梁行4間，桁行15間，草屋根で銀札5貫631匁余を要した。7日，佐田番所須藤三郎右衛門から海岸防禦の兵器の請求があり，庄屋兵頭又左衛門が鉄砲10挺，砲手16人，玉薬10発宛，鑊10，持人10人を拠出した⁹⁴⁾

嘉永4年正月9日，異国船防禦の警固を桜田佐渡，砲術方手伝を鈴木治太夫・田中安兵衛に命じた⁹⁵⁾ 防禦のための藩兵の出動を改変し，威遠流が加えられている。2月2日，幕府に命ぜられていた領内海岸里程・水深の測量絵図が完成し，鹿村忠助・松浦源助に金100疋宛下賜された⁹⁶⁾ 7日，威遠流7貫目玉カルロンナーテ砲鑄造につき，引受証人である御持筒与兵衛・伊助が銀札3両宛を賞与されている⁹⁷⁾ 正月24日，宗城は参勤交代のため出迎いの御座船大鵬丸に，新造半度大砲1門（玉薬5発分）・新造グライバス1座（玉薬10発分）を搭載するよう松田・板倉に命じている⁹⁸⁾ 2月28日，板倉は威遠流鑄造砲台木その他必要品の仕成を出願した⁹⁹⁾

4月17日，百目玉砲の鑄造に失敗し，「巢中疵アリ」実用に堪えずと，鉄砲師九右衛門より申し出，鑄造がえが命ぜられている¹⁰⁰⁾

5月9日，宗城は江戸を発し，6月7日宇和島に帰った。宗城上府中の宇和島藩の軍事改革は，その主導性にも拘らず，遅々とした歩みで，全体的には旧態依然ともいえる。

嘉永4年7月7日、板倉からカルロンナーテ万力8個を春の試発の時に破損したので、取繕料鉄3貫目、松炭8俵・鍋鉄8貫500目・白炭5俵を要求している。¹⁰¹⁾同日、自書をもって堀池玄太郎・大橋此面・井関新吾・山内万四郎・桜田助市・橋本浪江に中伝免許、渡部平兵衛に初伝免許を許している。22日、鉄砲師九右衛門が天保14年江戸で修行し、帰国後大砲鑄造を命ぜられてもたびたび失敗するので、ふたたび江戸での修行を出願し、5～6カ月間の修行を許可された。¹⁰²⁾24日、居館目當場での砲術稽古について、外庭における三十間発機場での土分砲術稽古の自由が認められた。¹⁰³⁾27日、宗城は威遠流銃試撃検分のため保田村へ行った。¹⁰⁴⁾晦日、ふたたび保田村へ行き大銃発射、13発が着弾地をそれた。¹⁰⁵⁾8月3日、宗城は須賀川堤から天満山への威遠流半度震天砲等の試射を検閲した。¹⁰⁶⁾8月12日、板倉・松田から御庄台場へ、7貫目玉カルロンナーテ玉薬20発を備蓄し、従来貯蔵していた3貫目震天砲と交換を命ぜられたため、玉薬諸入用費の交付を願い出て許された。¹⁰⁷⁾合薬8貫400目、20発分の合薬は15貫600目必要だが、震天砲の合薬7貫200目があり、その差額である。実丸7ツ代銀札420目、空丸8ツ代同400目、数玉128代同288匁、数玉5放分諸薬味代同175匁、実玉空丸15放分同断代135匁、計1貫418匁とされている。宗城の威遠流発展計画の中で、銃砲の大量生産が進むが、それは同時に粗製に流れる傾向を生じさせたと考えられる。同時に久良砲台の改良も進行しているが、弾薬の製造・補充は決して順調に行ってはいない。8月25日、須賀橋付近での威遠流・自縁流大銃試撃を検分し、6貫目玉打前に成功した。¹⁰⁸⁾

同4年9月17日、板倉志摩之助が御番を免除され、威遠流引受専任を命じられた。¹⁰⁹⁾22日、宗城の備形(陣形)検閲の際、野戦銃試射のあること、その場合、先手4幡もこれに準じて大銃を随意に試発せよと命じ、火薬は1幡に仕成代料銀札5貫目宛と定めた。¹¹⁰⁾24日、横吹の威遠流発砲所へ行き試射して、砲手井関九郎介・徳久忠介ら6人が賞賜された。¹¹¹⁾27日、城代家老松根図書が24年在勤して隠居した。¹¹²⁾宗城は「麓の世の事ハ今日よりすてしとて我を見すてす尚教てよ」という詠歌を与え、嗣子内蔵に家督614石を相続させた。図書は愚了と号

した。この内蔵が宗城の謀臣・松根図書紀茂である。10月6日、八幡河原で五組練兵が行われ、宗城は馬上から各組足輕に声をかけている。¹¹³⁾

同年11月12日、宗城は自書をもって、徳久忠助と吉田藩士戸田豊之允に威遠流皆伝を許した。¹¹⁴⁾ とくに徳久は「殊ニ先頃其身發明之薬度表相製、流儀為筋ニ茂相成」と、宗城の苦心していた火薬の改良に成功している。12月2日、板倉は7貫目玉カルロンナーテ、3貫目同、同天砲、海陸兼用の砲台、ドライブス砲台の鉄物・万力等にチャン（瀝青）を塗付したいとして、銀札50目を下付されている。¹¹⁵⁾ 22日、森丈左衛門が「霰之筒」の廢銃を修補して軍備に使用できるようにし、猪越での試射でも皆中したとして、自書をもって賞された。¹¹⁶⁾

嘉永5年正月3日の御野始は、同3年の場合を先例として実施された。¹¹⁷⁾ 2月27日、砲術五流惣代森丈左衛門・石川平左衛門の願いにより猪越での試発が許された。¹¹⁸⁾ 29日には、この砲術五流に200目玉筒1挺宛を鑄造することになり、各流から絵図面を提出させ、国友長右衛門に予算を立てさせた。¹¹⁹⁾ 五流とは南鵬流・亀島流・稻富流・心極流・自縁流である。この件について、板倉は銅135貫500目、錫14貫600目、鉄10貫目の下付を申し出た。板倉が諸流砲術も統轄していたことが分かる。板倉は嘉永元年に威遠流150目玉野戦銃車台4挺の製造を命ぜられていたが中止となっていた。この200目玉砲は5～6月に完成し、一流へ弾10発の計画で火薬5斤、鉛2貫目が渡されている。この年、威遠流砲術は大砲鑄造、弾薬製造とも格別の進歩はみられなかったといえよう。

2月13日、四幡・旗本幡の備形が城下町内で検閲された。¹²⁰⁾ 14日、宗城は芝崎観音堂御覧所で威遠流の試射を検閲した。¹²¹⁾ 15日には保田村で行われた。18日、宗城は八幡浜までの遠馬を強行しようとしたが、家老に諫止され、東多田村（現宇和町、大洲藩領との境界）までとした。¹²²⁾ この遠馬・健歩は、嘉永4、5年頃たびたび行われ、士卒の身体鍛練の意味を持っていた。

嘉永5年(1852)3月3日、宗城は参勤のため宇和島を出発し、3月27日江戸に着いている。3月3日、宗城は黒澤丹後・小波軍平・門多斎兵衛・小川伴太夫・森丈左衛門という古流砲術家に威遠流入門、しかも奥伝免許とし、威遠

流への統合を試みている。¹²³⁾ 27日、徳久忠助は領中絵図の製作に協力した普請方佐輔への賞与を願い、銀札三両が下賜された。¹²⁴⁾ 30日、板倉は望遠鏡付象限儀が破損のため、修繕料銀札12匁、7貫目玉砲の試射によりその台・万力破損の修繕料27匁と鉄4貫目の交付を認められた。¹²⁵⁾ 同日、御庄砲台の13貫目玉と7貫目玉砲の交換、玉薬等の完成により交換のため、これらを碇伝馬船で回漕し、砲座の地床を改造、また、備付けの6貫目玉砲「巢中工合悪シキニ付、現地で錐入」させたいと願い出、板倉・葛西一平・徳久忠助・国友長右衛門が行った。¹²⁶⁾ その経費は7貫目玉砲1挺、同台1挺と付属品、玉薬入箱五個、敷板2枚、敷角2挺、棒の類4、5本、回漕された13貫目玉砲1挺も同じような部品があり、ほぼ砲座の状況が分かる。

4月17日、威遠流6貫目玉ランゲハウ井ッスル砲鑄造のため、銅198貫・錫19貫800目、白炭70俵、その他の経費計1貫794匁6分が支出された。¹²⁷⁾

5月12日、水知理介に焔硝製法を命ぜられ、これまで石川平左衛門の心極流砲術指南を継承した。¹²⁸⁾ 石川は亀・虎・富士抱・待宵抱の銘のある大砲、外に50目玉、10匁玉の砲を藩から借用していた。7月19日、宗城は、セーリフ著「ヘウエーギングデルラステン」1冊、この翻訳書16冊と同絵図1巻を幕府に提出している。¹²⁹⁾ その内容は明らかでない。8月11日、千葉ヶ峠で威遠流大砲の試射があった。¹³⁰⁾ 8月22日の大風雨で、領内に田畑2万1,186石余の全損毛があった。¹³¹⁾ 9月27日、銃砲師九右衛門が以前失敗していた威遠流4貫目玉砲1挺の改良に成功し、軍用とされた。¹³²⁾

嘉永5年11月26日、宗城は国家老桑折左衛門に書翰を送った。¹³³⁾ その中でペリ一来航の情報を伝え、「実ニ此度之墨奴ハ油断不相成、屋敷丈の備ハ少々相修度と、此頃指揮候」と、江戸藩邸に威遠流3貫目1坐を取り寄せたと述べている。したがって、「藍山公記」には演習の記事は少ないが、宇和島でも相応の試射が継続していたと考えられる。

12月22日、板倉志摩之助から同年春以来、大砲鑄造の専任者として、軍用合薬は水野深右衛門が引き受け、秋までに100貫目、その後も100貫目を製造し

たので賞賜を願い、目録金 300 疋を与えられた¹³⁴⁾ 鈴木多仲は威遠流初伝免許を与えられた。猪越高森大砲打場は畝数 10 歩で、砲 1 挺と打場幕がようやく出来るという狭さであったため、峯通りから野川平へ 4, 5 畝程年貢引きで、五流砲術方へ下付された¹³⁵⁾ 板倉は鉄砲師九右衛門に 8 匁玉剣付筒 1 挺を試作させるため、経費・鉄等の交付を願い出て許された¹³⁶⁾ 新式小銃である。

嘉永 6 年 (1853) 2 月 27 日、威遠流 150 目玉野戦銃車 2 挺が破損し、その修繕料計 200 目が支給されている。威遠流大銃打前については年額の予算が決定されていて、奥伝以上は多く試射できたが、中伝以下のものは野戦銃打方だけであった。板倉は大銃の予算中から火矢打前の経費銀札 100 目(諸薬味共)、焰硝 1 貫目・硫黄 300 目・麻木灰 250 目を支出することにした¹³⁷⁾ 3 月 3 日、板倉は先月 23 日震天砲での火薬試射に反省点があり、近く今年製造の軍用合薬での試射を願い、新旧の火薬を交換した¹³⁸⁾ 火薬の改良が進み、旧製のものは使用されなくなっている。17 日、板倉・鉄砲師九右衛門は、威遠流大銃鑄立場の拡張を出願して許可された¹³⁹⁾ 27 日、亀島流・稻富流・自縁流・南鵬流 4 流の門弟から、山奥産出の焰硝 50 貫目程の購入を願い出た。同時に 5 流砲術方へ渡されていた 200 目玉鑄形五膳の仕立料も渡すよう、板倉から願い出て許されている¹⁴⁰⁾ 翌 4 月、宗城は帰国することになり、6 月ペリー来航という事態を迎える。

注

- 1) 河内八郎『徳川斉昭・伊達宗城往復書翰集』96 ページ
- 2) 河内前掲書 98 ページ
- 3) 同上 117 ページ
- 4) 同上 120 ページ
- 5) 同上 121 ページ
- 6) 同上 125 ページ 6 月 8 日付宗城書翰
- 7) 同上 128 ページ
- 8) 同上 136 ページ
- 9) 同上 139 ページ
- 10) 同上 141 ページ

- 11) 同上 151 ページ
- 12) 同上 158 ページ
- 13) 同上 161 ページ
- 14) 同上 174 ページ
- 15) 同上 176 ページ
- 16) 同上 183 ページ
- 17) 同上 185 ページ
- 18) 同上 189 ページ 「老中連名沙汰書」
- 19) 同上 199 ページ
- 20) 「稿本藍山公記」巻14 23丁 以下「公記」
- 21) 佐藤昌介『洋学史の研究』402 ページ以下
- 22) 三好昌文『松根図書関係文書』72 ページ
- 23) 佐藤前掲書 422 ページ
- 24) 河内前掲書 101 ページ
- 25) 佐藤前掲書 453 ページ
- 26) 同上 454 ページ
- 27) この長英の居住地は現存、奥10畳・二の間6畳の部屋である。
- 28) 「公記」巻15 2丁
- 29) 同上 9丁
- 30) 同上 19丁
- 31) 同上 30丁
- 32) 同上 33丁
- 33) 同上 巻16 25丁
- 34) 佐藤前掲書 472 ページ～
- 35) 「公記」巻16 38丁
- 36) 河内前掲書 226 ページ
- 37) 菅菊太郎『南宇和郷土史雑稿』 243 ページ～
- 38) 三好昌文『忘れられた洋学者－伊予宇和島藩士大野昌三郎』（『松山大学創立70周年記念論文集』）
- 39) 「公記」巻21 37丁
- 40) 同上 巻16 38丁
- 41) 同上 巻17 2丁～
- 42) 同上 巻18 5丁
- 43) 同上 巻18 15丁
- 44) 『家中由緒書』下 同人の項

- 45) 「公記」 卷18 23丁
- 46) 同上 卷18 36丁
- 47) 同上 卷18 40丁
- 48) 同上 卷18 51丁
- 49) 同上 卷18 54丁
- 50) 同上 卷18 55丁
- 51) 同上 卷18 64丁
- 52) 同上 卷19 9丁
- 53) 同上 卷19 10丁
- 54) 同上 卷19 15丁
- 55) 同上 卷19 22丁
- 56) 同上 卷19 24丁
- 57) 同上 卷19 31丁
- 58) 同上 卷19 50丁
- 59) 同上 卷19 52丁
- 60) 同上 卷20 17丁
- 61) 同上 卷20 33丁
- 62) 同上 卷21 8丁～
- 63) 同上 卷21 17丁
- 64) 同上 卷21 18丁
- 65) 同上 卷21 26丁
- 66) 同上 卷21 30丁
- 67) 同上 卷21 35丁
- 68) 同上 卷21 38丁
- 69) 同上 卷21 38丁～
- 70) 同上 卷21 46丁～
- 71) 同上 卷22 8丁
- 72) 河内前掲書 213 ページ
- 73) 同 217 ページ
- 74) 同 221 ページ
- 75) 同 232 ページ
- 76) 同 235 ページ
- 77) 同 239 ページ
- 78) 同 242 ページ
- 79) 同 250 ページ

- 80) 同 257 ページ
- 81) 同 266 ページ
- 82) 同 271 ページ
- 83) 同 280 ページ
- 84) 「藍山公記」巻23・24・25 参照。26・27 は琉球問題。斉彬の襲封に際し、斉昭と宗城は積極的役割を果たした。なお、鹿児島藩内の内紛も続く。
- 85) 河内前掲書 282 ページ
- 86) 「公記」巻22 28丁
- 87) 同 巻22 30丁
- 88) 同 巻22 52丁
- 89) 同 巻22 66丁
- 90) 同 巻22 69丁
- 91) 同 巻26 2丁
- 92) 同 巻26 5丁
- 93) 同 巻27 47丁
- 94) 同 巻27 49丁
- 95) 同 巻28 5丁
- 96) 同 巻28 23丁
- 97) 同 巻28 27丁
- 98) 同 巻28 34丁
- 99) 同 巻28 41丁
- 100) 同 巻30 14丁
- 101) 同 巻31 6丁
- 102) 同 巻31 16丁
- 103) 同 巻31 16丁
- 104) 同 巻31 17丁
- 105) 同 巻31 19丁
- 106) 同 巻31 21丁
- 107) 同 巻31 25丁
- 108) 同 巻31 58丁
- 109) 同 巻32 20丁
- 110) 同 巻32 23丁
- 111) 同 巻32 25丁
- 112) 同 巻32 26丁
- 113) 同 巻32 32丁

- 114) 同 卷33 24丁
- 115) 同 卷33 37丁
- 116) 同 卷33 52丁
- 117) 同 卷34 7丁
- 118) 同 卷34 57丁
- 119) 同 卷34 58丁~
- 120) 同 卷35 16丁
- 121) 同 卷35 17丁
- 122) 同 卷35 20丁
- 123) 同 卷36 7丁
- 124) 同 卷36 30の1丁
- 125) 同 卷36 31丁
- 126) 同 卷36 32丁~
- 127) 同 卷36 56丁
- 128) 同 卷37 9丁
- 129) 同 卷37 52丁
- 130) 同 卷37 64丁
- 131) 同 卷37 70丁
- 132) 同 卷37 86丁
- 133) 同 卷38 51丁
- 134) 同 卷39 46丁
- 135) 同 卷39 51丁
- 136) 同 卷39 51丁
- 137) 同 卷41 56丁
- 138) 同 卷42 10丁
- 139) 同 卷42 42丁
- 140) 同 卷42 65丁